

あつたかい雨が東京花時の雨にさす傘  
 通夜も明けの一羽がとんでゆく  
 明けてからも降る雨が流れのほとり梅咲いた  
 一軒あつてふきのとうこの家のおぢいさん  
 雑木林には川普請の火を焚く煙らしくて春  
 濱に濱納豆ならび海の上の日  
 寒月や石やせせらいでゐる  
 河岸枝れてゐれば冬苺のくれなる  
 移り來てもう友だちの出來たらしい子の聲梅咲く  
 窯跡に窯築いてゐるのも見え畠の梅谷の梅  
 柿ちよつとしぶいことも歸還してこんな日本  
 啼く鳥も春、墓場近く荷車曳いてゆく  
 蛇の目さしてゆく秋雨が少し坂になる所  
 大根干してあるのが朧月の此處らも焼けたところ  
 押されて乗つて押されて降りて夕べは雪  
 牧牛の鈴の音ちりちりと雲の流るる  
 雨だれも春らしくひきうすすなほにまはります  
 からりと晴れて今日の白いむすび出來ました  
 今日から學校へゆく子の赤い手袋  
 踏切に人がたまり春の淡雪  
 雲とてない芋畑いもの葉  
 ずつと日のつまつた驛の立  
 小さくなつた日本の山がしづかに日は山に入る  
 枯草工場もえんとつとも休んでゐる  
 今雲をはなれたる光として海には松

日野素木  
 古川紅雲  
 高橋政二  
 山根志乃竹  
 加藤白水境  
 桐井葦彦  
 岡本流一  
 梁瀬阿羅與  
 中村秋夫  
 東信太郎  
 齊藤第九人  
 三井不二雄  
 入江功一

が、私は俳句の上では、今直に國語運動連盟の申合せを諸君は強ひることはしまい。たとへば、その連盟では、動物植物の名は必ず「かな」でかくといふことにした。だが、「松」「杉」「梅」「犬」「馬」「牛」などいふ文字は、他の漢字を適當に使つてゐる以上、これらの文字とても當分使つてゐていゝと思ふ。これらの字は形も單純であるし、誰にも読みやすいものであるから。然し「櫻」といふ字は書くのにやゝこしい。「朴」「椽」などいふ字は國民學校では教へてない。これらは「かな」で書くべきである。「豚」「狼」「蟬」などいふ字は、今日の文字常識では、大體讀めるものだけれども將來に漢字を捨て、ゆくといふ方針のもとに、これらも「かな」で書いた方が好ましいと思ふ。

第四に「かなづかひ」は必ずしも發音式に従はないが、歴史的の用法を重く見ないことにしませう——例へばこの「かなづかひ」といふ言葉でも、發音式に書けば「かなづかい」であるが、これは「かなづかひ」と書く方がいゝ。元來「つかふ」といふ言葉が主であるから、その「つ」が有聲音化しての「づ」である。又、「つかはう」「つかひます」「つかへ」とはたらく言葉である

軽い駒下駄はいて出て鶯でも鳴きさうな  
 えんどうの花やそらまめの花や鳥が下りてゐて段々鳥  
 ひよどり食べこぼした木の實がちらばつてゐる夕べを掃く  
 雨が雪となりゆく南天の實  
 小笹のゆれ止まず日のしづむ時  
 遠くに祭ばやしのやうな星の明るいまいばん  
 木の芽ぶく風の山羊が啼いてゐるそのひげ  
 父を火にするとして此の雪道まつすぐ  
 わらんべと小犬と雪きえさか  
 残つた門と見越しの松と焼跡の空が秋  
 蜜柑屋さんと蜜柑の山と晝が日南となる  
 母は暗くて起きて寒さ明るくなつて雀の聲  
 波音春はくもりて松葉こぼれてゐる参道  
 湧泉ゆたかに冬菜洗つてゐる  
 ゆるんだかんの水にかげ  
 山の方へかへる生徒が一むれ雪に雨  
 かうぞの皮は雪にさらして夕日である山の一村  
 うす雪の朝は獵犬が吠えてゐる山の宿を立つ  
 尼さん背がまろくて木魚たたかれる観音さまの櫻  
 日時計のある芝生に湯溜りさくらの芽  
 燒あとの煙突が一本、晝月が消えさうな  
 硝子銀の線ひいて雨が来てこれから事務始める朝  
 春風こちらへ来るだんだん妻の顔子の顔となる  
 鮎のびちびちと冷たくこれを手にして早春  
 枇杷の木は雀鳴く朝焼けが曇つて早春

福本逸子

水田潤

中西國友

栗田千可志

飯田三茶

東草二郎

山川白朝

栗田白夢

水野田々詩

石井洋音

森田和夫

堀正道

から、「つかひ」と書く方がハッキリしてゐ  
 ていゝ。然し、單に歴史的な「かなづかひ」  
 である「蛙」の「かはづ」は「かはず」と  
 書いてしまつて差支ない。又一くづ(屑)  
 と「くず」(葛)の如きは、かなづかひを以  
 て書き分けられるけれども、それほど必要  
 ではない。凡て言葉といふものは、前後の  
 意味に依つて理解されるもので、單語一つ  
 がポツンと聞かされるものではないのだから、  
 同音異義の言葉といふものは、もし「か  
 な」やローマ字にしたならば混同を生ずるだ  
 らうと、常識的に心配されるほどに、實際  
 に於ては心配のものではない。「蜘蛛」(く  
 も)と「雲」(くも)の如き言葉は「かな」で  
 は書き分けられないが、實際の會話や文章  
 に於て雲と蜘蛛とが取りちがへられる心配  
 はほとんどあるまい。

次に「かな」を多くすれば読みまぎれな  
 いために、コンマを使ふことも考へなくて  
 はならない。今まで、俳句ではリズムのあ  
 りやうを示すためにコンマを使つてゐた。  
 そのコンマと読み紛れをふせぐ爲のコンマ  
 と一しよになつては困るので、此の方はコ  
 ンマでなくてコロンの用ふことにしては  
 どうかと考へてゐる。或は字間をあけて書  
 くといふことも考へられていゝ。字間をあ

月、梅の花が咲きました  
 草を摘んである草に風ふく  
 梅、この道も渡し場へ通れる  
 ラヂオが民主演説してある庭の梅  
 星が一つ遠くにゐてランプ、そばで編棒うごかしてある  
 汽車が煙吐いてゐるのも春、貯炭場のすそに咲いてゐるのも  
 いちにも降りつめてゐる海が窓のまへ櫻のつぼみ  
 豆の花の咲いてゐる道子の手ひいてゆく  
 背なむけて土くれをたたいてゐられた  
 ここら田畑の雪まだらにして雲雀鳴くさへ  
 早春、田を打つ人も歩いてゐる僕も  
 野火が午さがりの土手を行く馬車  
 あみものすすむ夜のしづくのリズム澄んでくる  
 石段のぼればみたらしに藤の花今日宮詣り  
 なつまめ豆になりまひるなくにはとり  
 ようやく雪籠りからのがれようとして靴の穴  
 向うのさくらこちらのさくら渡しをわたる  
 枯木にきのふの小鳥きのうの所にある夕日、早春  
 遠山ひかる水仙の芽  
 梅ちるころの炭火は白くなつたままで  
 けふ事務机にも窓の櫻が満開  
 新しく建つた家が田んぼの向ふにはつきり見えて枯れてゐる  
 梅あらしの中にあいてゐる  
 薬塚につもつた雪の、まるい月となる  
 三味線草に陽のてり雲が雨を降らしして通る

北田大林木  
 伊藤三龍  
 品川幸一郎  
 木村次子  
 桑原愚村  
 犬飼啓三  
 中野弘雄  
 折居遙子  
 吉村しをり  
 梅木成敏  
 並木縁郎  
 酒井健之  
 吉川群狐  
 杉浦經子  
 鈴木單衣女  
 杉原明雄  
 橋本光男  
 中原紫保子  
 八重田保朗  
 河崎平一郎

けて書くことは決して不自然ではないの  
 で、本来から云へば、一語は一語として密  
 集して書くべきで、従つて語と語との間に  
 空間の出来るのが自然なのである。とにか  
 く――  
 第五に、「すべて一氣に改めるのではな  
 くて、ぜんじに進む方針とします」――こ  
 れで行きたい。で、當分のうち、誌上の文  
 字づかひも、まち／＼であつて、過渡期的  
 の不統一が多いであらうが、それはだんだ  
 んに統一してゆきたいつもりである。

俳句のうへで、漢字を制限してゆくとと  
 もに、作者の名まへも亦、これに従はな  
 くはならない。自分の名前は、自分の勝手  
 ではないか、とも考へられようが、將來、  
 その活字が無いことになれば、一般性をも  
 たないことになり、獨りよがりみたいにな  
 ことにならう。本名は戸籍にあるもので、將  
 來、この戸籍上の文字をどういふ風に取扱  
 ふかは、政府としての考のきまり次第、國  
 民として其に従ふことにならうが、雅號は  
 めい／＼の好みに依つてつけたものだから、  
 此の際、獨善的な好みは考へ直してほ  
 しい。つまり、號にむづかしい文字を使つ  
 てる方は今のうちから改めることを考へ

山に入り陽がさびしい雪の起伏  
 山に陽がさし里に陽がてり新年  
 梢に残る柿の實の空の遠くに爆音  
 焼残った實驗室、麥の芽青い一人泊つてゐる  
 もつてきてくれた櫻挿しあましてゐる  
 ももの匂ひがして果樹園はももの花それに沿ふ道  
 あちこち藥打つ音の雪のはれた夕映え  
 雲も椿も、此の日みんなひとつになるといふ(組合結成)  
 ようこそ來られて早春の橋肩を並べて通る  
 澁柿しぶくて子供等は風の中  
 寒肥ばらまいて何時も見えてゐる山並  
 アメリカ兵の黒いまつ毛雪解けの町歩めてゐる  
 梅もどき赤かつた新雪の林を滑つて行く  
 お尋ねしてよかつた庭木のみかかん  
 なでしこの花、師のまへお茶をいたただく  
 窓のそと若竹に月の入らんとする  
 焚火に手をかざして民主主義とさうして  
 蛙が鳴いてゐるそれを暗い納屋にてきく  
 春は橋から牛の鼻ひいてくる  
 雨にぬれたにはとり五六羽と雨あしをみてゐる  
 夏帽をかぶりずでに林のざはめきをきし  
 ペタル、もろ夕日にななる  
 まだおみえにならない受付の少年と窓の朝の雲  
 雀に子雀も歸つてしやべつてゐる聲  
 こはれた鉢とこはれてない鉢と日向にひわの花さいてゐる

竹内孤明  
 積木晃楓  
 高橋松二  
 横瀬碧山子  
 前田睦夫  
 内藤吹星子  
 五十嵐みい  
 鈴木敬三  
 佐藤吟雨  
 宮澤軟風  
 鎌倉白洋城  
 風牛  
 平野冬蘆  
 加賀谷灰人  
 中村敏喜  
 御崎花月  
 扇田勇  
 大町桃水  
 石黒骨石  
 石黒泉女  
 中垣三郎  
 鶴岡邦彦  
 管克久  
 小橋康則  
 平田定一郎

ていたどきたい。

一體、雅號といふものは、本名を以てする社會生活といふものから、別に遊離したる第二の自分を一つの存在として意識し、又、意識せしむるといふためのものとすれば、これは封建論の遺物といへる。で、さういふものは面白くないといふ考から、一時、雅號を排斥する論もあつたが、然し、親のつけた名が自分の好みに合はないならば、自分の名は自分の好むやうにつけて差支ない、但し、改名といふことは、戸籍法ではなかく面倒だから、これを號として使つてゐればいゝと思ふ。但し、私は「姓名判断」による迷信的の改名はさんせいにしない。自分の趣味に依り、自分の性格を象徴するやうな意味あひの文字を選擇のがいゝと思ふ。さうしてなるべくカクの少い、やさしい文字がいゝ。昔の俳人でも、人の記憶に残つてゐる人は、「文章」「去來」「其角」「一茶」などゝ、大抵、やさしい文字である。「芭蕉」は晩年「はせを」とやさしく書き、それを好んでゐたやうである。それから音でよむか、訓でよむか、判然しないやうな號の方もあつたが、一つの名としたらば、二やうに讀まれないやうな注意も必要だらうと思ふ。

遠山には雪が来てゐる。麥の芽  
 わらんべふたりねぎぼうず夕日がしづかな  
 梅の木李の木花つけてこんや夕月  
 饒跡は青い麥のもう一年になる  
 教室菜の花は壺に萬葉の時間  
 子猫月夜のふところでもらはれていつた  
 お地藏さんに水仙の芽が出て朝日一ぱい  
 警戒もなくななり七ツ星山に近くて冬  
 松葉くすべて晝食とする海が見えてゐる  
 わかれみちはもう夜の深いしもよのみち  
 佛にかきもちあげてゐるこげたかきもち  
 焼木の中の灯のいくつかは見え其の「が我が家  
 遺骨はふる里の小さな橋いま渡つて行く  
 水車と椿、ここから丹波といふ  
 吉野山川光つてゐる寒空遠くて  
 遠山の雪兄さんの肩母さんの肩幾年ぶりか  
 盡きぬ噴煙を、召されて征きて還る  
 夕やけて風ぎきつて散つてゐる  
 冬薔薇がしづかに揺れて海が見えます  
 千兩の實が赤くて戦も今年も終り  
 軒に干葉が白い障子が舊正月で  
 軒影も寐ついた家並の月の川晋  
 シヤツポふんわりとだぶついてみる青空  
 焼かれて空が美しい大阪、用足すとて歩く  
 子供等並んで行く並木朝日さして冬

竹久清信  
 椎野紫絃  
 中島山櫻子  
 山口國俊  
 土山山査子  
 山下千恵子  
 阿部昇喜  
 松井柳城  
 星島芳子  
 山田ころ  
 林香風  
 渡邊天仙果  
 片桐光成  
 永井喜太郎  
 秋山義生  
 富田淑子  
 池邊正一  
 坂田義三  
 倉内岩男  
 松本東天紅  
 近藤庭三  
 渡部伊津三  
 望月皓  
 前田一塔  
 吉原三峽水

矢代書店刊

京都市中京區六角通  
高倉西、同營業部

荻原井泉水著

柿と桃

著者自装、美本  
B6判一八〇頁

價 十二圓、送料 二圓

井泉水氏最近の隨筆集にして、旅と生活  
と自然と個性とのおりまぜられし華かに美  
しき世界。「柿と桃」ほか、廿九篇。一讀、  
桃のごとき水のしたゝる新鮮味と、柿のご  
とく、さはやかに「うまい」といふ後味と  
をもたらすであらう。

ポルドオ作 長篇小説 野 火

シントルム作 短篇集 湖

モオロア 現代英國君主制

河井醉茗著 詩集 若き女性に贈る

定價 拾五圓 送料 貳圓

定價 八圓 送料 貳圓

定價 拾圓 送料 貳圓

定價 貳拾圓 送料 貳圓

雀もゐるてバラツクの屋根の霜  
 雨が日に光る稲刈り刈進み  
 驛に灯がはいるとそこから麥畑旅にゐる  
 神棚にも供へて豆飯、朝いたたく  
 傷だらけの久しい僕の机が焼け残つてゐる春  
 掘りかへす匂ひも春の黒土ではある  
 誰も通らない雪路の窓が夕空  
 石に落葉に雨  
 雪が止んで朝のどの家のラヂオも體操  
 又かへりにも會つて娘さんの手には白菊  
 朝もや鶏が鳴く鶏小舎のかぼちやの花の晴れてゆく  
 麥の芽と青い風が聳過ぎ  
 庭一杯に靱の歸つてをられた  
 風がやむとチラチラする干大根干してゐる  
 倉は焼け残つた質屋の樋の雀と富士が白くなつてゐる  
 ふけゆくまちのつきよのあしおと  
 早春一本みち流れに添うてゆく  
 どこもかも鳥にしてしまつて麥の芽  
 冬の夜せせらぎわが若さも流れ行くか  
 どの家も屋根に石置いてゐる海が冬晴れ  
 しぐれらしく去んでしまふと夜のふる貫ひにてゆく  
 山茶花白くロシヤの重たい小説、それを閉づ  
 挿して百合の白さなど朝は朝日がよい病人  
 薬沓のいろの新しく雪ふみていづる  
 女傘さして通り冬は橋の冬の景色

岩田知司  
 非研逝水  
 富永谷衣  
 扇田搖草  
 植村子純  
 戸川直助  
 菊地健次郎  
 岡李久  
 三田巨稻  
 大島莊司  
 關根不佐子  
 瀬戸照子  
 多胡比左志  
 星野あきら  
 吉田青  
 松尾秋浦  
 三井澄雄  
 走内庭草  
 小野寺大葉子  
 藤村龍平  
 朝霧北岡  
 林昭一  
 加藤黛杉子  
 升屋忠治  
 谷口晃男

白井書房刊

京都市京大北門前  
 振替 京都九二二

荻原井泉水著

京洛春秋

B6一九〇頁  
 送費共十六圓

句と隨筆によつて綴られた京都市脚記である。洛北・洛南・洛西・洛東の四部に分けられ、如何に著者がかくれた京都の遺跡古刹を訪ねたかが、流麗な筆致で描かれてゐる。在庫、送金次第發送。

岩田 潔著

俳句靜思

B6二八〇頁  
 送費共十九圓

詩人の透徹した瞳に映じた俳句鑑賞の書。第一部現代作家論、第二部俳句評釋、第三部俳句歳時記を収む。好箇の入門書。

新俳句叢書

- 1、日野草城句集 春
- 2、長谷川素逝句集 定本句集
- 3、岩田 潔句集 女 郎 花
- 4、石田波郷句集 風 切

(一冊十圓・送料一圓)

なきがら (特選)

岡野宵火

今は妻とわたくしとの距離はしろき楯に手を合すること  
なきがらをひとつの灯がはなれずにゆく  
なきがらとて夜を仰向いて車がひかれてゆく  
寒ン空へ消ゆる煙の、つまをけむりとするとか  
ひとを焼くなりひとつか煤けた顔へたのむことども  
妻の骨の焼けたばかりなのをくづれてゐるのを、その箸を揃へてもつこと

骨壺のおもみいだき膝におきさうして、をる  
朝に見し死顔しろき骨壺にしてきて夕べ  
戸を閉めると、夜の木枯しになつて吹く  
秋風が浪を女のおくれ毛をふいてふいて別れた

なづなのはな (特選)

北田千秋子

櫻に間に合ひし事云ひ餘の事を云はず (復員三句)  
生れ更りて詩詠まむ梅の白きが咲く  
机には春の花を、これからいそがしい  
末子がうたへてりんごの歌うちの春の日  
焼跡むかしの道はありなづなの花はさく  
焼跡焼け残りつば木に椿さきてをる  
焼跡見渡せば見上ぐればひばりなく  
春の日の水を渡らう橋も焼けてをる  
焼跡はるかに春の海も見えやうこのあたり  
焼跡を掘りおこす鉄こそは焼残り  
焼跡 麥畑となりしがけふの春さめ

鎌倉消息

井泉水

去年の今夜、東京麻布の舊層雲社も松原町の層雲社も、青山の舊大泉園も、一しよに火になつてしまつたのかと思ふと感慨がふかい。東京ばかりでなく、全国的に、日本の文化資料がどれだけ失はれたか知れないが、層雲関係のものも、ずいぶん灰になつたのである。私の舊い著書などは、私の手許にも無い物が多い。愛蔵してゐる人の許にはあらうが、一般の人は見たくとも手にすることが出来ない。それで、目下、凡ての日本文化が再興されなければならぬ氣運の中で、層雲社としては層雲文庫の保存と普及といふことに着手したい。

第一に、層雲文庫の保存としては、「層雲文庫」を作ることだ。一體「層雲文庫」は大正十二年の關東震災以後、東京に作らうといふ案が立つて、當時基金の募集をした。(層雲の舊い人は知つてゐられよう)だが所要の金額が集らずして、着手が出来ずに終つたのである。(若し出来てゐたらば、今度の震災で焼けたに違ひない)地方には、福岡に三宅酒壺洞君個人の層雲文庫

うぐひす (遺稿)

鈴木蜻郎

こども聞きわけよきにつけ茶碗の茶柱  
疎開生活のそのまま居つく氣になつてゐる粟の穂  
天皇機關説かくて老博士菊を愛すといふ  
ぬくぬくねんねこで種痘にゆきます枯木の鴉  
昏れてもふる雪のつるべのつな  
雪はれてつるつる雑巾掛けで雑巾バケツの湯氣です  
雪の日は雪つむ山の向うに先生や君たち  
雪の日火燵してもらうてうちにある兄弟  
日が一んち忙がしがる妻のあと追つかける鶏が冬の日ぐれ  
うちからは見えない富士の美しさ云ふ客と冬が晴續く山  
ちよつとあづけたもの貰うてこの家の犬梅咲いてゐる  
青い海が春のくも麥畑のくも  
おのおの日ぐれのかげをもち木のかたち、はる  
手をかりてはく足袋である身のおとろへ  
うぐひす、ふしどに坐りちよつと羽織るもの  
微熟の手にして匂ふ花がな  
うぐひす、いへば遺言めく匂にすれば辭世めく  
先きだつ不孝は、我を看守る老ひし父の端然  
蕾はまだ堅い櫻の一枝も見せられていまはか  
眼も口ももう、私をかこみみんなるといふ  
一つ二つくる春の蚊を追ふとする自分の腕か  
ただ水ほしく水といふこゑを出さうとするこゑ

(四月六日)

(四月八日、臨終の夜の作)

があつたが、これも焼けてしまつた。酒壺  
洞君も復活したいと云つてゐる。川崎(静岡  
縣)の平岡國次郎君も、同地に層雲文庫を  
作りたい希望と聞いた。地方分散といふこ  
とは萬一の時にはよろしい。然し、中央少  
くとも鎌倉)に完全な「層雲文庫」を建設  
したいものだと思ふ。

第二に、層雲文庫の普及としては「井  
泉水全集」を刊行することだ。小生の文字  
通りの全集を出すとしたならば大さうな部  
数になる。菊判四百頁のもの五十冊位にな  
らう。それは大きすぎて實現しがたい。で  
「全集」とは云ふものゝ「選集」として、  
四六判三百頁のもの十冊位を第一期として  
刊行したいと、今、そのプランを立てゝゐ  
る。

此の具體的な實行方法に就ては、社とし  
ても充分に案を練つてから發表したいと思  
ふが、諸君からも、好き智慧を拜借した  
い。その上、協力を願ひたい。いつの時代  
にも、先づ金のいることにはかりはない  
が、當今は殊に其の感がある。今は誰も金  
が自由にならぬ時だから、諸君になるべく  
迷惑のかゝることが無くして、これを實現  
せしめる方法はないものかと、考案中であ  
る。



# 雨のころ

池原魚眠洞

ゆ　う　ひ　に　は　枝　が　芽　を　も　つ  
馬　が　通　る　と　馬　の　に　ほ　ひ　春　の　雪　乾　い　て　ゐ　る  
二　拜　二　拍　手、し　の　の　め　白　き　は　梅  
鯉、さ　く　ら　の　雨　が　池　に　音　す　る　ほ　ど　降　る  
か　う　も　り　一　つ　で　通　り　二　つ　で　通　り　電　線　ま　だ　見　え　て　暮　れ　て　ゐ　る  
月　が　出　て　か　ら　暮　れ　る　池　が　あ　る　か　は　ほ　り  
え　ん　ど　う　盛　り　上　つ　て　咲　く　雨　の　海　が　あ　る  
み　ち　し　ほ　の　あ　め  
ね　こ　ろ　ぶ　と　青　葉　に　晝　の　空　が　あ　る　有　る　も　の　枕　に　す　る  
夕　空　屋　根　に　上　ら　せ　る　蔓　に　繩　を　お　ろ　し　て　や　る  
海　の　あ　め　暮　れ　て　し　ま　ひ　し　め　て　あ　る　門  
木　の　中　池　が　あ　つ　て　梅　雨　が　ふ　り　や　ん　で　ゐ　る  
南　瓜　の　花　に　海　の　ゆ　う　ひ　が　暑　い　は　だ　か　の　ふ　ん　ど　し  
植　田　に　し　て　家　の　横　こ　ん　ぼ　ん　三　日　月  
草　が　か　く　し　て　し　ま　つ　た　水　の、氷　お　と  
わ　が　の　ん　で　水　兩　の　手　に　さ　げ　て　い　ぬ　る  
蕎　麥　は　の　び　て　紅　い　莖　の　粟　は　垂　れ　て　案　山　子　の　ゐ　る　坂　を　上　つ　て　ゆ　く  
木　槿　の　く　ら　さ　宵　が　月　を　落　し　て　ゐ　る  
大　雨　風　の、雨　だ　け　は　や　ん　で　ゐ　て　水　の　上　の　つ　ば　く　ら  
螢、夜　が　更　け　て　ゆ　く　水　車　の　音　で　あ　る  
命　さ　へ　あ　れ　ば　御　奉　公　は、こ　れ　が　一　枚　き　り　の　手　拭、で　汗　ふ　く  
犬　を　つ　れ　て　き　た　り　春　の　日　防　空　壕　に　住　み　て　こ　ど　も　た　ら　健　在

## 社中より

長野に「山なみの會」が出来た。北朗氏が陶房を京都から移されて四年、其間陶房に集ふ人達の氣持が合して層雲句會に發展した。九月二十六日、井泉水先生を迎へて發會、田句八十八、稻市、父草、句嘯郎氏等遙々參加盛會であつた。幹事は北光氏と白草氏。福島縣梁川の波紋社に活氣が出てきた。一水氏のたゆまぬ努力である。毎句會二十名近い人達が集り若き溢れてゐるといふ。近頃東北地方が總體に盛である。秋田では雜誌「圓座」の復活あり、弘前の「鷹」、五所川原の「山河」、氏家の「かみなり」いづれも堂々としたものである。層雲關係の地方誌で其後發刊されたものに鳥取縣の有紀男氏主宰「風土旬報」、東京春扇氏編輯「新道」、千葉縣、健治氏編輯「水星」、香川縣で虫太氏編輯「光音」等がある。名古屋の秀明氏が「週刊名古屋」で活躍、層雲作家の句が紹介されてゐる。學校では魚眠洞氏の惟信中學に生徒の編輯にかゝる自由律句「柘」「爽風」の二誌があり、咲魚氏の巖谷高女でも句誌を出してゐる。十月二十三日井先生が行つて講演されてからは尙句作熱が旺盛である。敦之氏の佐世保商業

梅

秋山秋紅蓼

ことし見られて梅の花白く山のなかの梅  
 梅の匂ふ枝咲いて折れてる  
 遠山もはつきりとけさは梅のひらき  
 梅咲く丘梅咲く道へ歩いて出る  
 町へは遠い村々の梅咲く道を通り  
 梅二本咲き出して留守の庭である  
 機絲のべてゐる庭の梅赤くつぼみ  
 梅の匂も日かげれば梅の咲く中  
 梅の咲くさへ古里からは離れてる  
 あかるさけふは落葉かくおとのする林  
 あめがゆきになつてくる山の高い木  
 山のあめが木にふり枝にふるさま春めく  
 さくらけふはちりかけた山の郵便やさん  
 あんずの花は山すそへ路が見えてお日和  
 桃のはなと葉と枝が藁家のよこ  
 山を出れば花の咲く方の山へある道  
 からすとんで櫻の咲いてる山のすがた  
 涯でもないやうな草の道すこし焼あつ  
 つつじゆうひするやまのみちつづく  
 木瓜の咲いて白いの赤いのなんどこにも  
 空が林のなかにある木の芽  
 山が大きく青んでくるとわらびのたけ

でも句會が出来てゐる。  
 ・東京では目黒の祐天寺で東京綜合句會が毎月末の日曜に催されてゐる。祐天寺は杜子氏の寺で、石路、武二、榮一氏等の顔も見える。十月二十七日には露郷氏追想の會だつた。東京が焼けてしまつてから、それから先づ 祐天寺の會ができたのだが、他に江戸川方面で鉉十郎氏、葛飾で淨心寺氏、瀧野川で篤子さん、世田谷で星童氏、春扇氏、杉並で宵火氏さとの氏等がそれ／＼句會の準備をしてをられる。麴町日本橋京橋あたりのビルに勤めてゐる人達が、退けてビルから降りてちよつと集つて句を語らうとて往年のビル人句會が復活された。内幸町の日産ビルに八洲雄氏がゐて其處の食堂で毎月第三土曜日の午後が定例の會。世話人は鳳車氏。東京の學生仲間でも句會を作つた。青山學院専門部の吹星子氏が幹事である。この事務所は層雲社内に置く。學生諸君は参加されたい。  
 ・大阪では梅田新道の若狭屋菓子舗が翠江氏の店で大阪同人の溜りになつてゐる。いつも同人の誰かが来てゐて港の會が随時催されてゐるわけである。店の壁に井先生の句が掛けてある。京都では從來の泉の會とは別に、荻氏木衣樓氏が肝入で新しい句會が出来た。句會は祇園の木衣樓氏宅である。  
 ・自由律俳句入門宣傳用のパンフレットが出来た。御入用の方は送料を添へてお申越ありたい。  
 (俊二)

# ひとりとごと

井 泉 水

戦争中は、私のやうな考をもつてゐる者は大さう苦しい氣持だつた。我國が戦争をしてゐるのだから、國のために戦争に協力すべし、とは觀念としては正しいやうだが、戦争が長引けば長引くほど日本はメチャクチャになる、少しでも早く戦を打切るべきだと信じてゐた私は、心から戦争に協力する氣にはなれなかつた。と云つて其考を口や筆にすることは許されなかつた。其上、私は日本文學報國會といふものゝ一人として行動しなければならなかつた。これも時としては苦しい氣持だつた。其會の一部である俳句部會に於て定めた方針には、反對はしないが、私は私としての所信をはつきりとするには卑屈でなかつたのである。

俳句部會では、日本文學報國會の指導に依つて「戰意昂揚」をモットウとした。いはゆる戦争俳句といふものをしようとした。戰場にゐるものが戦争を俳句にするのは自然のことである。だが、國內にゐながら、戰場を想像して、戦争俳句を作るといふことはウソである。戦争の初期に於ては國內は「銃後」と呼ばれた。後期に於ては國內とても戰場にちよくぞくしてしまつた。即ち、戦争は我々の生活の中にはいり込んできた。従て、日々の生活感情の中にある戦争が俳句になるといふことはシゼンである。けれども、殊更に戦艦をあほり立てるやうな氣持の句は、私にはピツタリと來なかつ

た。又、戦は必ず勝つといふ風な合言葉的な俳句は、空疎なるお題目をとなへてゐるやうで、私は同感しかねたのである。

日本文學報國會の或る會合の時、情報局から某といふ情報官が來て、戦争中の文學者のありやうといふことを談じた。短歌は直接に戦争感情の炎となつてもえてゐるが、俳句はどうもくすぶつてゐるといふやうな一節が其の談話中にあつた。その情報官の態度が、いかにも時を得たり題に、そりくりがへつてゐることも不愉快だつたが、私は心の中で、此の小僧が何をいふのかと思つた。世間の俳句はどうあらうとも、私の信ずる俳句は、戦争の手先に使はれるものではないぞ、といふ事である。

俳句の精神といふものは「和」といふことにある、と私は信じてゐる。「和」といふことは、本來に於て「戦」と相反したる思想である。俳句といふものゝ性格が元來、平和主義者なのである。戦争中は平和主義といふものが公然と許されなかつたのであるが、實際に於て「和」といふ心が消失したのではない。敵に對して戦ふからには、味方に於ては大きく一致してゐなければならぬ、「和」といふ心は、かういふ風に轉向せしめられたものゝ、やはり「和」としてはたらいてゐたのである。戦争がいよ／＼はげしくなるにつれて、「大和一致」といふ言葉が強調されたのも此の爲である。私は戦争

中の俳句といふものゝ役割は此の方向に於てはたらくより他はないと信じた。生活の中にくひ込んで来た戦争といふもののがれつなきびしきから、人の心がとかく荒みゆき、カラ／＼に乾いてゆく、従つて人の心と心とがとがり合ふ、又はまさつする。さういふことを少くするやうに、人の心をやはらげて行くものが、俳句の使命だと信じた。かういふ行き方は、いはゆる戦意昂揚ではない。然し、戦場に赤十字病院が必要であると同じ意味で、戦争の中で俳句が其の仕事をしてゐるとは云へる。それと共に、赤十字といふ思想が博愛共濟を主とする上で、戦争中と雖も、戦争を越えて其次に来る平和を理念としてはたらいてゐるやうに、俳句といふものが意圖するところは、戦争を越えて次に來るべきものを少しでも早く來らしめたいといふ理念をほのめかしてゐるものだと見られても、ごうも耻づることはないと、私は信じてゐたのである。

今日、戦争は終つてゐる。敵といふものは無くなつた。日本は平和な日本に立ちかへつたと云つてもいい。然し、日本國內の現状はどうであらうか。國民はほんとうに平和のよろしさを味つてゐるのであらうか——「否」と私は見る。國民の多くの者の氣持は、戦争中よりも却てとげとげしい氣持になつてゐる。やゝもすればいきり立つのである。隣人の間には愛情がなくて、しつとがある。戦争中には、壓力的ではあつたが協力してゐたものが、今日では、自由といふ名をかりて、おそろしく利己的にすらなつてゐる。こんなことで日本の將來はどうなるであらうか。戦争中は、「外」に向つて戦はんが爲に、少くとも「内」に對しては和してゐた。今日では、「外」に向つて和を宣言したものの、「内」に於てはおの／＼が戦ふ氣構を心としてゐるのだ。こんな事では斷じていけない。こんな事では、

日本は内部的に亡びるより他はないと思ふ。

それならどうしたら好いか。これを解決する道としては、第一に好き政治が必要だらう。又、人の心をけはしくした原因たる生計不足を回復することも必要だらう。其他、此の爲にたさなければならぬことは澤山ある。その凡ての手段を試みるべきである。たとへばひんしの病人には、服薬も必要だ、注射も必要だ、滋養物も必要だ、親切な看護も必要だ。好いと思ふことは凡てやるべしだ。さうして、さういふ病人には慰めとなるべき「好き言葉」を與へることも亦必要ではないか。私は今日の日本の現状に於て、「俳句」といふものが、此の「好き言葉」に相當するものではないかと思ふ。

「俳句」といふものは、——殊に自由律の俳句は——そんな功利的に用ひられるべきものではない、といふ意見もあるだらう。私もかつて其様な説をなす側にあつた。だが、今日の情勢は日本が生きたか死ぬかの境である。此の場に際して、そんな純理論的な冷たいことを云ふものは日本人でない、のみならず本當の人間でないと思ふ。——本當の人間でないものに、どうして「俳句」が解るか、私はさうも思ふのである。

そこで、上に話したところの、日本文學報國會の俳句部會のこと、戦争中にはいはゆる「定型派」とわれ／＼「自由律」派とも、膝をまじへて語りあつた、協力なし得ることを協力した。それが終戦後、もとのバラ／＼になつてしまつた。それは「外部」からの強制に依つて出來た團結だつたから、強制がなくなると共にこはれたのであるが、これを廣い意味の俳句道として親和といふ氣持から、派別的觀念をはなれて提携するといふ、内部からの融合力として親しく盛り立て、行くことが必要ではないか、私はさうも思ふのである。

## 俳句を書く上で

- 一、耳できいただけでは解らない言葉は使はぬことにしませう。
- 二、古い言葉は、やむをえない場合のほかは、使はぬことにしませう。
- 三、漢字はだん／＼と減らしてなるべく「かな」で書くことにしませう。
- 四、「かなづかひ」は必ずしも發音式に従はないが、歴史的の用法を重く見ないことにしませう。
- 五、すべて一氣に改めるのではなくて、ざんじに進む方針とします。

## 各位

層雲社

## 目次

文章	六十にして立つ……………	1
國字問題と私	……………	2
北越日記	……………	8
清露抄	……………	26
餘言	……………	32
社中より	……………	44
鎌倉消息	……………	42
ひとりごと	……………	46
俳句を書く上で	……………	48

## 次

# 有隣亭蔵書

俳句	北越暮春	井泉水	31
	なづなのはな	千秋子	42
	なきながら	宵火	42
	うぐひす	蜻郎	43
	雨のころ	魚眠洞	44
	梅	秋紅蓼	45
	麗日壇	井泉水選	8
	明月壇	井泉水選	32
	(表紙)	鈴木信太郎	

## 投稿略規

- ・ 投稿は誰でも自由
- ・ 俳句は一人一月一稿
- ・ 句數は一般は十句迄
- ・ 句稿の添削を望む方は別項内規に依る
- ・ 用紙は半紙二ツ切大のもの一枚に五句迄、楷書清記、二枚以上は左上カドをつづる
- ・ 締切は毎月十五日
- ・ 投稿先 層雲社編輯部

## 層雲 第三九八・九號

昭和三十一年十月二十五日印刷  
昭和三十一年十一月一日發行

編輯兼發行人 萩原藤吉

印刷人 太田馨

印刷所 東京印刷株式會社

發行所 神奈川縣大船町山之内一五三四  
層雲社  
振替東京八〇二三番  
東京都神田區淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社  
定價金五圓(送三十錢)

配給元

## 層雲會内規

・層雲會は井泉水先生を中心として自由律俳句を研究し、會員相互の親睦をはかる爲のものです。

・本會の會員には雑誌「層雲」を配布し又臨時「層雲會報」を配布します。又随時に俳句會吟行會研究會を開きます。

・本會は會員五名以上あるところに地方支部を置きます。支部は其地方に層道の普及をはかられたく本部としては出来るだけの便宜を（例へば講演會に講師を出張せしめる如き）をはかります。

・本會の會員を分ちてA會員、B會員とします。B會員は月額四圓A會員は月額六圓以上を拂込むものです。

・層雲への投稿はB會員は毎月十五句迄、A會員は三十句迄送句出來ます。A會員の投稿は井泉水先生の批點を受け、層雲に登載する前に返稿します。A會員は一年一回「層雲手帳」又随時印刷物の配布をうけます。

・本會は新日本文化運動として、「自然、自由、自己一體」を綱領とする層雲道を弘布普及したく、此の運動資金として有志よりの後援を期待してをります。

## 讀書くらぶ

・井泉水先生の新刊著書を優先的に入手する爲に「層雲讀書くらぶ」があります。

・讀書くらぶ會員は随時「くらぶ」宛に購買上の金を拂込んでおき其の金の範圍にて優先的に發行圖書の送付を受けます。

・拂込は月を限らず御都合のよい時に随時にてよろしく。但し一回十圓以上のこと。

・讀書くらぶに入會希望の方は入會費十圓をお拂込下さい。これは「くらぶ月報」の通信費に宛てます。

・會費及び送金は大船町大泉園内（振東三〇〇一七）にねがひます。

荻原井泉水 著

層雲 近刊書

層雲第十八句集	限定會員本	拾八圓	千六〇
層雲第十九句集	限定會員本	拾八圓	千六〇
大泉叢書 春蘇る	頒	價 四圓	千三〇
大泉叢書 青葉若葉	頒	價 拾圓	千六〇
隨筆集 私の綴り方	會員本	拾三圓	千九〇
句集 金砂子	頒	價 拾五圓	千九〇
句集 千里行	會員本	貳拾圓	千九〇
隨筆集 桃と柿	頒	價 拾貳圓	千九〇
同 京洛春秋	頒	價 拾六圓	千九〇

## 讀書くらぶ

神奈川縣大船町山之内  
振替東京三〇〇一七番

曆

雲

第十四號

第二・三號

昭和二十一年十一月一日(每月一回)發行

昭和二十一年十月二十五日印刷

定價五圓